

特別史跡百濟寺跡 築地塀復元工事（瓦葺）見学会

令和5年11月24・25日

百濟寺跡は、奈良時代後半に百濟の王族の末裔、百濟王氏が建立した氏寺の跡と考えられています。伽藍配置は、南門・中門・金堂・講堂・北方建物（食堂）・北門が中軸線上に並び、中門と金堂は回廊で繋がり、その内側には2つの塔が東西に並び建ちます。枌や柱座を円形につくり出した精巧な礎石が多く残り、主要堂塔跡が良好に遺存することや、文献に天皇の行幸記事とともに登場することなどから、昭和27年に「史跡の国宝」にあたる特別史跡に指定されました。

これまでの発掘調査で、基壇外装など最新技術を駆使して造営され、中央官寺と比較しても劣らない高い格を備えていたことや、寺院経営のための付属院地の様子がわかってきました。また、百濟寺を中心に方形街区を伴った古代都市の様相が徐々に明らかになり、古代のある時期に百濟王氏が最上級の氏族であった様子を語れるようになってきました。

軒瓦

各堂塔の軒先を飾った瓦の文様は、古代では、軒丸瓦14型式、軒平瓦10型式あります。なかでも単弁十四弁蓮華文軒丸瓦（M11型式）と単弁十六弁蓮華文軒丸瓦（M09型式）、均整唐草文軒平瓦（H01型式）が多く出土しており、これらのセットが創建時の組み合わせと考えられます。



写真 百濟寺跡から出土した軒瓦

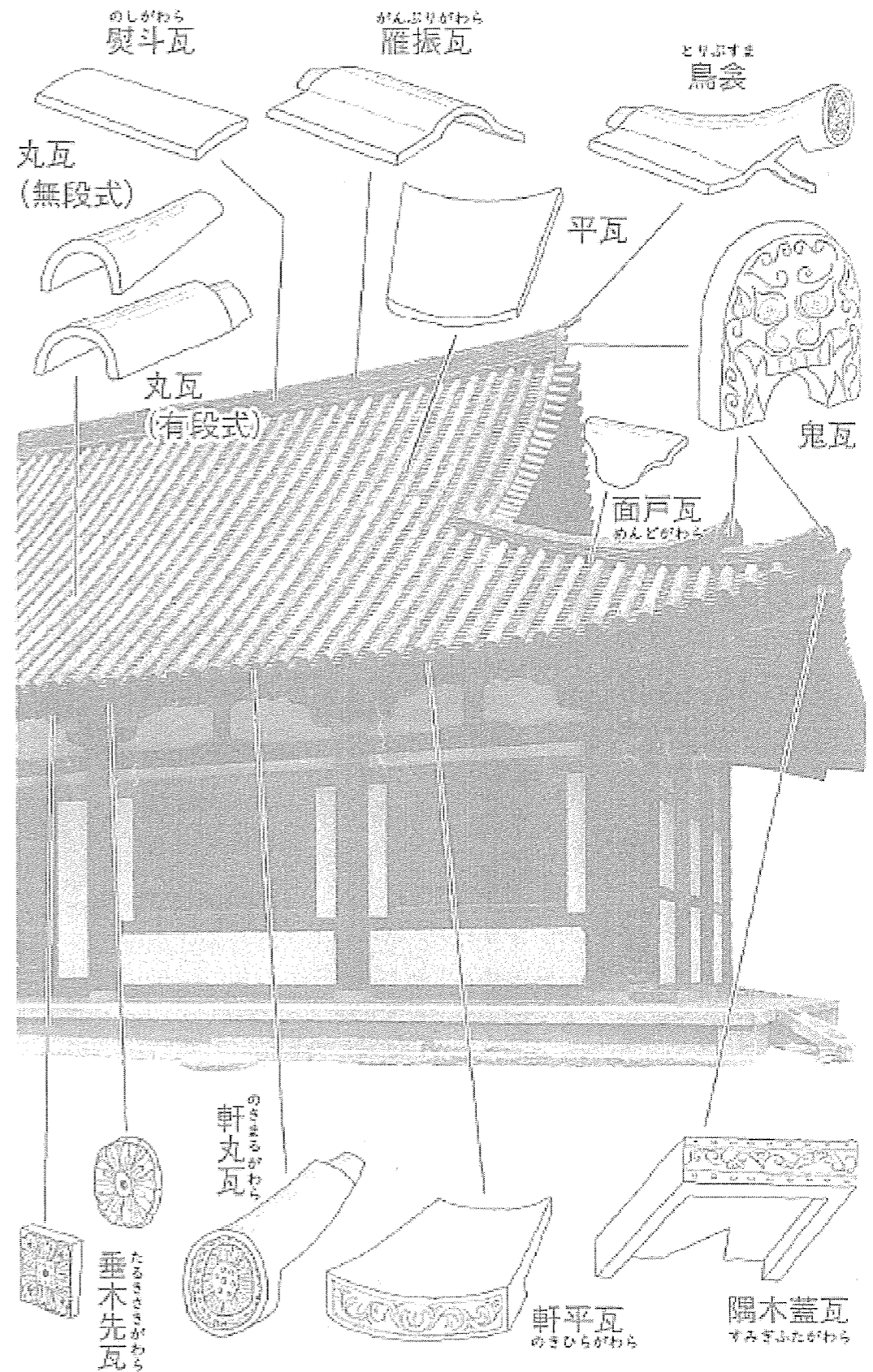


図 瓦の種類

（文化庁文化財部記念物課 監修
『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』2013年（に加筆）